

留学生から非好意的に評価された日本人学生の会話行動 — 非好意的評価に至るまでの相互行為の記述 —

大津 友美

【キーワード】 会話、接触場面、評価、留学生、談話分析

1. はじめに

留学生が会話相手の日本人学生の行動に対して、何らかの非好意的評価をすることがある。本研究は会話の微細な特徴に注目して、そのような評価に至るまでの相互行為を記述しようとするものである。

筆者は以前、初対面状況で、留学生が日本人学生の会話行動にどんな印象を持つか、どんな側面を好意的・非好意的に評価するかを調べることを目的に、留学生に対して初対面会話後のフォローアップインタビューを行ったことがある(大津, 2013)。インタビューの中で、留学生が日本人学生の会話行動を評価する発言を集め、内容分析したところ、留学生は特に日本人学生がどう会話進行に関与するかを重視していることが分かった。例えば、留学生が質問しているのに、日本人学生が最低限の返答しかせず話がふくらまなかったこと、留学生が早く切り上げたいと思っていた話題を日本人学生が長引かせたことなどが、留学生によって非好意的に評価されていた。

しかし、大津(2013)の研究結果は、あくまでも留学生自身が報告した意識を整理したものすぎない。フォローアップインタビューという手法は、実際の会話場面に結びついた意識を探ることができるという点では有効である。しかし、会話中の行動の詳細やそれに関わる判断は会話参加者自身も無意識に行っている可能性が高いため、会話中のどのようなやりとりを通して、留学生が会話相手に対して非好意的な評価をするに至ったのかまでは明らかにすることができない。フォローアップインタビューでは、留学生によって一方的に日本人学生の会話行動の問題点が指摘されたが、それは本当に日本人学生の側だけの問題なのであろうか。会話は参加者全員によって共に構築されるものであることを考えると、留学生が非好意的に評価した日本人学生の行動も、実際は留学生と日本人学生双方のやりとりを通して構築されたものなのではないか。そこで、本研究では、評価

の焦点となったと思われる会話断片の分析を行い、フォローアップインタビューでは語られることのない微細な会話の特徴について考察する。そうすることによって、留学生による日本人学生への非好意的評価がどのようなやりとりを経てなされたものなのかを記述し、留学生が非好意的に評価した日本人学生の会話行動が本当に日本人学生の側だけの問題なのかを再考する。

2. 先行研究

会話断片の検討に入るまえに、留学生、日本人学生というカテゴリーに限らず、日本語非母語話者による母語話者の会話行動の評価や印象形成に関わる先行研究を概観する¹。

まず、質問紙調査により、留学生自身が過去や現在の状況を振り返りつつ、さまざまな経験から一般化した意識を探ろうとする研究がある。小宮(2001)は、韓国人留学生を対象に、日本人の話し方のどんな側面に違和感、嫌悪感、不快感等のネガティブな印象を持つかを調べた。その結果、韓国人留学生は、主に「コミュニケーションの自己開示度」、「相手・周囲への同調の表現に関するもの」、「陳謝の表現に関するもの」、「コミュニケーションの真実度に関するもの」の4つにネガティブな印象を持つということが明らかになった。さらに、小宮他(2001)では、中国人、韓国人、台湾人留学生を対象に調査を行った結果、グループ間で評価に違いがあることも分かった。

一方、実際の会話場面に結びつけた意識調査も行われている。Fairbrother(2000)は言語管理理論に基づいて行われた事例研究で、ある一つのパーティーでの参加者の意識をフォローアップインタビューによって明らかにしている。規範からの逸脱が必ずしもネガティブに評価されるわけではないが、非日本人参加者によってネガティブに評価された日本人参加者の逸脱としては、非日本人参加者のうちの誰が相手かによって、ある日本人参加者が態度を変えていたこと、パーティーでカラオケをしたこと、非日本人参加者が皆で飲もうと思って持参した酒を主催者である日本人参加者が開けなかったことが報告された。

¹ 日本語非母語話者から母語話者への評価を扱った研究は、母語話者から非母語話者へという方向の評価に関する研究に比べ、数が少ない。渡部(2005:33)によると、日本語教師ではない一般の母語話者が非母語話者の発話をどう評価するのかが明らかになれば、その視点を教室での評価法に取り入れるなど教育の改善に生かせるため、母語話者から非母語話者への評価については、さまざまな研究が行われているとのことである。

筆者の研究(大津, 2013)でも同様に、フォローアップインタビューの手法を用いて、特定の出会いの場面に結びつけた意識調査を行った。Fairbrother(2000)が一つのパーティー場面での異文化間相互行為を全体的に捉えるものであるのに対して、大津(2013)は、会話のしかたそのものへの評価に焦点を絞った研究である。留学生が日本人学生の会話行動のどんな側面を好意的・非好意的に評価するのか、また、留学生の日本語口頭能力によって、評価のしかたはどう変わるのかを明らかにすることを目的とし、初対面の日本人学生との会話後に、留学生に対しフォローアップインタビューを行った。そして、インタビューの中で、留学生が日本人学生の会話行動を評価する発言を集め、内容分析したところ、留学生の評価の対象となった日本人学生の会話行動を11のカテゴリー²に分類することができた。また、中級者は日本人学生が面白く語るために用いる様々な表現を好意的に評価していたのに対し、上級者は、初対面会話で話される内容を重視し、双方向からのある程度の個人情報・意見の交換を適切と考え、それを促進する行動を好意的に評価することが分かった。しかし、このように、中級者、上級者それぞれに特徴的な評価がある一方で、留学生の口頭能力に関わらず評価の焦点となる会話行動もあった。それは、日本人学生がどう会話進行に関与するかに関わるものである。具体的には、「話題に貢献しない」「不適切な話題を選ぶ」という2つの会話行動が留学生によって非好意的に評価されていた。「話題に貢献しない」というのは、双方が適度に発言し、心地よく話をふくらませたいという留学生の思いに反して、日本人学生があまり自主的に話さなかったときなどになされた非好意的評価である。「不適切な話題を選ぶ」というのは、不適切で留学生が早く切り上げたいと思っていた話題を日本人学生が長引かせたときなどになされた非好意的評価である。しかし、前節で述べたとおり、この研究結果は、あくまでも留学生自身が報告した意識を整理したものにはすぎない。会話中にどのようなことが起こり、留学生が会話相手に対してそのような非好意的評価をするに至ったのかまでは明らかにされていない。そこで、以上の先行研究の成果や課題を踏まえ、本研究では、会話行動の評価の焦点となったと考えられる会話断片の分析を行い、何が起こっていたのか、その実際を検討する。

² 11のカテゴリーには、「A)自己開示」「B)相手への関心表示」「C)相手への共感表示」「D)相手の呼び方」「E)ほめ」「F)意図の示し方」「G)面白い語りの工夫」「H)会話進行への関与」「I)話し方の特徴」「J)非言語行動」「K)その他」がある。

3. 研究方法

3.1 データ収集

(1) 初対面会話の録音

本研究では、大津 (2013) で収集した 18 組の初対面会話を分析の対象とした。データはすべて 2007 年 9 月から 2008 年 1 月にかけて収集した。会話に参加した留学生 18 名は全員中国出身の女子大学生である。留学生の出身地域や母語によって日本人学生のふるまい方が変わる可能性があること、現在日本の大学では中国出身の留学生が最も多く、実際に日本人学生がキャンパスで接触する機会も多いことから、参加者を中国出身者に限定した。大学 1 年生から 4 年生までの女子で、学部はさまざまであるが、全員同じ大学に所属している。滞日期間は 1 年 1 ヶ月から 4 年 8 ヶ月までと幅がある。ACTFL-OPI (Oral Proficiency Interview) により、日本語の口頭能力については、10 名が中級と判定され、8 名が上級と判定された。

会話相手の性別によって評価の仕方が変わる可能性があるため、会話相手となる日本人学生 18 名も全員女子に限定した。出身地域はさまざまであるが、留学生と同じ大学の学生である。キャンパス内での留学生との接触頻度について質問したところ、18 名中 14 名が、大学で留学生と接触する機会はほとんどないか全くないと答えた。3 名は 1 週間に一度くらい、1 名はほぼ毎日接しているとのことであった。なお、1 年以上の海外滞在経験のある者はいなかった。

留学生と日本人学生を、同学年³で別々の学部の面識がない者同士で二人一組にし、空き教室や学生用ラウンジで話してもらい、それを録音した。参加者には、録音前に「会話を録音します。話題は何でも結構なので、自由にお話してください。20 分たったら、いつでもやめてください。」という指示だけ与えた。レコーダーの開始ボタンを押したのは筆者であるが、停止ボタンを押したのは参加者自身であった。

(2) フォローアップインタビューの実施

上記の会話後、2 日以内に、留学生それぞれに対して個別にフォローアップインタビューを行った⁴。最初に「留学生が日本人学生の会話行動にどんな印象を

³ 学年は同じでも、年齢は留学生のほうが 1、2 歳年上であるペアが多かった。

⁴ ただし、6 名の留学生には、2 日以内に行くことができなかった。

持つか、どんな側面を好意的・非好意的に評価するかを調べている」という研究の趣旨を説明し、初対面会話を行った時の意識について話してくれるよう協力を求めた。その後、話しやすい雰囲気作りと記憶の活性化を目的に、会話をしてみた感想、会話中に起こった問題、相手に対してどんな印象を持ったかなどを尋ねてから、実際の会話の録音を聞いてコメントしてもらうことにした。面接は Tannen (1984) やファン (2002) などを参考にして進めた。まず、会話を再生するときには、調査者は相手に影響を与えないように努め、相手が自主的に話してくれるのを待たなくてはならない。そのためプレーヤーの操作は留学生に任せ、話したいときに止めて自由にコメントしてもらい、話し終わったらまた再生してもらうようにした。留学生が、筆者が分析の焦点としている部分に触れない場合には、「今までのところで、何か思っていたことがありますか」など、できるだけ一般的な質問で相手の注意をその部分に向けさせた。その部分についての筆者自身の考えに言及するのは最後の手段であり、極力避けた。面接での使用言語は中国語か日本語で、留学生本人に、会話時の気持ちが話しやすいほうを選んでもらった。中国語が選ばれた場合には、筆者と留学生の他に、中国語を母語とする通訳者が立ち会った。インタビュー時間は一人あたり1時間から1時間半であり、面接でのやりとりはすべて録音した。

3.2 分析方法

フォローアップインタビューでの留学生のコメントを基に、非好意的評価の焦点となったと考えられる断片を初対面会話中から選び出し、会話の特徴づけを行った。非好意的評価を受けた会話行動にはさまざまなものがあるが、本稿では、そのうち、留学生の口頭能力に関わらず評価の焦点となっていた「会話進行への関与」に関わる会話行動を取り上げ、論じる。具体的には、留学生によって日本人学生が(1)「話題に貢献しない」、(2)「不適切な話題を選ぶ」と非好意的に評価された2つの会話の断片を用い、そのような日本人学生の会話行動がいかに関話を通して構築されたものであるかを例証したい。なお、本研究は分析対象となるデータの規模が小さい。また、本稿は2つの会話断片のみを記述するものであるため、事例研究的側面があることを付言する。

4. 非好意的評価につながった会話の特徴－会話の分析の結果から

4.1 「話題に貢献しない」という評価はどこから来たのか

会話参加者である留学生 IS1 (中級者) は、会話相手であった日本人学生 JS1 に対して、「私から質問しないと話してくれない。私と話をしたくないみたいだった」と感じたという。なぜこのような印象を持つに至ったのだろうか。IS1 がそのように感じたとき報告した会話の箇所を分析すると、「IS1 の質問－JS1 の最低限の返答」という隣接対のあと、「JS1 による返答終了の再表示」がくり返し起こっていた。このような JS1 の行動によって IS1 が相手への働きかけを続けていかざるをえなくなったと考えられる。その一方で、IS1 には質問以外の選択肢もあったはずなのに、いつも質問で相手に働きかけていたことが観察された。JS1 と IS1 双方のふるまいによって、「IS1 の質問－JS1 の最低限の返答－JS1 による返答終了の再表示」というパターンが構築され、IS1 の JS1 に対する非好意的評価につながったのではないと思われる。

[断片 1] は、JS1 が中国に研修旅行に行ったときに中国人の一般家庭を訪れたことがあるという話をしているところである。

[断片 1]⁵

- 01 IS1 : え (0.4) ホームステイ (0.4) じゃ - じゃな : い ?
02 ((中略))
03 JS1 : 家庭におじゃまして、
04 IS1 : huh huh
05 JS1 : ギョウザ (.) 作って (0.4) >ど [うも<=
06 IS1 : [huh huh
07 JS1 : =ありがとうございます [: (h) み (h) た (h) い (h) な .
08 IS1 : [huh huh huh huh huh huh huh hhh
09 (1.0)
10 → JS1 : はい.
11 (0.6)
12 IS1 : >宿泊は<ホテルで (0.4) 住ん (0.4) でました ?
13 JS1 : あ そうですね 宿泊 : は、
14 IS1 : あ [:
15 JS1 : [ホテルで.
16 (.)

- 17 IS1 : 何日 : ですか ?
 18 JS1 : .h な : ん (.) ぱく だっ (O.4) たかな. さ : ん (.) ぱく ぐらい
 19 した ん ですかね もう ちょっ と あった か もしれない 四 泊 ぐらい
 20 だ った かな : .
 21 IS1 : は : [: ん
 22 → JS1 : [と 思 い ます .
 23 (O.4)
 24 IS1 : そ う な [ん
 25 → JS1 : [た し か .
 26 (1.0)
 27 → JS1 : はい .
 28 (1.4)
 29 IS1 : 中 国 の 食 べ 物 が 好 き で す か ?
 30 JS1 : 結 構 好 き で す ね : . ((この後も会話は続く))

IS1 が 01 行目 で 中 国 で ホー ム ス テ イ を し た の か 質 問 し た の に 対 し て、 JS1 は 03 行目 から 07 行目 に け っ て そ れ は ホー ム ビ ジ ッ ト で、 餃 子 を 一 緒 に 作 っ て 帰 っ た だ け だ と 答 え て い る。 JS1 は そ れ 以 上 は 話 を 続 け ず、 IS1 も ター ン を 取 っ て 話 し 始 め る こ と は な か っ た た め、 09 行目 で 長 め の 間 が 起 こ る。 そ れ で も JS1 は 自 分 の 旅 行 に 関 す る 話 を 続 け よ う と は せ ず、 10 行目 で 「はい。」 と い う こ と に よ っ て、 自 分 の 返 答 が 終 了 し た こ と を 再 表 示 し、 そ れ 以 上 話 す こ と は な い こ と を 示 す。 こ れ は 二 者 間 会 話 で あ る た め、 JS1 が 話 し 終 わ っ た こ と を 再 表 示 し た 場 合、 IS1 が

5 トランスクリプトに用いている記号は、西阪(2008)を参照した。

- [発話の重なるの始まる時点。
 = 複数行にわたっているが、一連りの発話。
 (数字) 沈黙や間合い。0.2秒以下の短い間は(.)。
 : 直前の音の引き延ばし。コロンの数は引き延ばしの相対的な長さに対応している。
 - 言葉が不完全なまま途切れている。
 .h / h .hは吸気音でhは呼気音。hの数はそれぞれの音の相対的な長さに対応している。hは笑いを表すのにも使われ、有声の笑いはhuhで示す。また、笑いながら発話していることを示すときは(h)を用いる。
 ? 語尾の音の上昇を示す。
 . 語尾の音が下がり区切りがついたことを示す。
 , 音が少し下がって弾みがついていることを示す。
 > < 発話のスピードが目立って早くなっていることを示す。
 (()) その他の注記を示す。

次のターンを取って話さざるをえなくなる。そのため、IS1は11行目の0.6秒の間のあと、12行目で新たな質問をする羽目になったと考えられる。

同様のことが12行目以降についても言える。12行目でIS1が中国滞在中はホテルに泊まっていたかと聞いたのに対し、JS1は13、15行目で「あ そうですね 宿泊：は、ホテルで。」と最低限の返答をしている。それを受けたIS1が17行目で「何日：ですか？」と質問を畳みかけるが、相変わらずJS1は18、19、20行目で「何泊だったかな（中略）四泊ぐらいだったかなあ」と記憶をたどっていることを示しつつ、最低限の情報提供で話を終えてしまった。IS1は21行目で「は：ん」という承認の発話で聞き手として理解を示すが、JS1は旅行についての話は続けず、「と思います。」(22行目)と言いきって、自分の返答が終了したことを再表示し、04秒の間が起きている。25行目でも同様に「たしか。」と言って返答終了の再表示をし、さらに長めの間に続き、27行目でも「はい。」と言って、自分の話はもう終わっているということを再表示する。それを受けてIS1は29行目で、12行目と同様に、長めの間に続き、新たな質問をして次の連鎖を始めざるをえなくなっている。

このように、IS1の質問に対してJS1が最低限の返答をし、さらなる話を続ける代わりに、自らの返答はすでに終了していることを再表示するというパターンがあることにより、「JS1は私と話をしたくないみたいだ」という印象をIS1が持つに至ったと思われる。しかし、その一方で、話を続けないJS1に対し、IS1には自分のことを話しはじめるなど別の対応も可能であったはずだ。しかし、いつも次の連鎖を質問で始めていたことから、「IS1の質問-JS1の最低限の返答-JS1による返答終了の再表示」というパターンから抜け出せず、「私から質問しないとJS1は話してくれない」という印象を持つに至ったと思われる。

4.2 「不適切な話題を選ぶ」という評価はどこから来たのか

留学生IS2(中級者)は、中国国内の経済格差について聞いたがった日本人学生JS2について、「もっと楽しく話せる話題があるはずなのに、なぜ経済格差のことを聞いてくるのか」と思ったとのことである。IS2がそのように感じたとも報告した会話の箇所を分析すると、JS2がさまざまな方法で中国の経済格差を話題に取り上げ、発展させようとしていたことと、IS2がその話題を切り上げられる可能性のある箇所、相手に更なる働きかけのきっかけを与えてしまったことが観察された。それらの行動によって、IS2が初対面会話では不適切と考える経済格差

の話題が長く続き、非好意的な評価につながってしまったのではないかと思われる。

[断片2]は、JS2が、多くの中国人旅行者が日本に来てブランド品を買って帰るというニュースをテレビで見たことを報告し、それに続けて01、03行目で中国人は金持ちが多いという印象を受けたと述べているところである。

[断片2]

- 01 JS2: あ: [すごい中国の人はお金持ちが(.)多い [のかな: =
02 IS2: [ん: : : : [ん: : : :
03 JS2: =と(h)思(h)っ [て.
04 IS2: [まあ多分(.)経済の(.)格差はあります
05 [ので.
06 → JS2: [あ そうなんです(.) [かね: =
07 IS2: [ん: .
08 → JS2: =やっぱり: .
09 IS2: ん: .
10 → JS2: 今すごい なんか(.)上のほうの人は: [すごい=
11 IS2: [ん: .
12 → JS2: =今お金持ちなんですよね: .
13 (.)
14 IS2: う: ん.
15 JS2: う: : ん.
16 → IS2: やっぱ格差あります.
17 → JS2: ありますか [やっぱ. =
18 IS2: [ん: .
19 → JS2: =え どういう(.)ときに(.)そういうのは(.)か-あ-(.)
20 → 思うんですか: ?格差があるな: とかって

IS2が04、05行目で「まあ多分(.)経済の(.)格差はありますので。」と考えを述べたのを聞いたJS2は、その後、中国の経済格差の話題を発展させようとする。まず、06、08行目で、「あ そうなんですかね: やっぱり: .」の「ね」と「やっぱり」という形式から、JS2が自分もその話題について知識を持っているということを示しつつ、IS2からさらなる話を引き出そうとしているのが分かる。さらに、09

行目でIS2から「ん：.」という最小限の返答しか得られなかったJS2は、今度は、10、12行目で、「上のほうの人は： すごい今お金持ちなんですよね：.」と述べ、自分が知識を持っているということだけでなく、何を知っているかを具体的に示し、相手の返答を引き出そうとする。また、17、19、20行目では、「やっぱ格差あります。」(16行目)とIS2が言ったのを受け、17行目で「ありますか やっぱ。」とIS2の「やっぱ」ということばを取り込んだ形で反応したあと、間をおかず19、20行目でどういうときに格差を感じるのかを問う質問を続けている。質問は、そのあとに続く行為として返答を要求する (Schegloff & Sacks, 1973) ため、06、08行目や10、12行目に比べ、相手からの返答を要求し、話に巻き込む度合いが高く、IS2は求められた答えを返さざるをえなくなったと思われる。以上のように、JS2は、さまざまな方法でIS2の話を引き出し、経済格差の話題を発展させようと試みている。

一方、IS2のふるまいに着目すると、07、11行目では、JS2のはたらきかけに対し、「ん：.」という最小限の返答で済ませているのに対し、16行目では、「やっぱ格差あります。」と、04行目で述べた自分の意見を再提示している。IS2の最小限の返答(07、11行目)を受けたJS2は、15行目ではターンを取って話し始めることはしていないため、IS2次第で、この時点でこの話題を終結に向かわせることも可能であっただろう。JS2と同様にターンをパスして、話すつもりがないことを示すこともできたはずである。または、別の話題を始めることもできたであろう。16行目のIS2の意図としては、単に沈黙して気まずくならないように何か言えることを言ったにすぎないのかもしれないが、表層的には「やっぱ」という形式から、IS2が「どう考えても格差があると考えざるを得ない」という強い気持ちを持って再主張しているかのように(実際は単なる誤用だとしても)解釈可能である。JS2が17行目で「ありますか やっぱ。」と、「やっぱ」の部分を取り込んだうえで倒置し、強調してくり返していることと、19、20行目で個人的にどんな時にIS2が格差の存在を感じるのかを問う質問をしていることから、JS2もそのように解釈したのではないかと思われる。IS2自身の16行目の再主張がきっかけとなり、JS2のさらなる質問、話題の発展へとつながっていったと考えられる。

このように、JS2が一方的に経済格差の話題に執着していたわけではなく、JS2とIS2の双方の行動によって、経済格差の話題は長引くことになった。その結果、「楽しい話題ではないのに、JS2が経済格差について聞いてくる」という印象を

IS2が持つに至ったのではないかと思われる。

5. おわりに

心地よくスムーズな接触場面会話のために「こうすれば確実である」というやり方はない。しかし、日本人学生、留学生それぞれにできることはあるであろう。日本人学生は、会話進行への関与の重要性を理解したうえで、留学生の反応をよく見ながら、発話機会を配分したり、話題を変えたりすれば、両者のより実り多いコミュニケーションに寄与することができるのではないかと思われる。また、留学生の側も、自分の会話への関与の仕方を調節することによって会話進行をコントロールすることができることを理解したうえで、会話中に困難な状況に置かれた際、それを切り抜けるための術を身につけておくことが必要なのではないか。

本研究は限られたデータに基づいた事例研究ではあるが、微細な会話の特徴を観察することによって、留学生による日本人学生への非好意的評価がどのようなやりとりを経てなされるものなのか、その一側面を記述することができたのではないかと思う。しかし、本研究が分析したのは留学生のコメントに基づいて選び出した会話断片であり、留学生の意識と実態は一致していない恐れがある。そのため、今後は参加者の内省に頼らず、会話の詳細な分析を通して接触場面会話の様々な側面を明らかにしていく必要があるであろう。そのように研究を積み重ねていくことによって、留学生と日本人学生のコミュニケーションのよりよい理解につながり、ひいては接触場面会話に関する教育の改善のために役立たせていけるのではないだろうか。

付記

本研究は、平成22年～25年度文部科学省科学研究費若手研究(B)「異文化間状況における対人関係構築のための会話能力の研究」(研究代表者：大津友美、課題番号22720198)の助成を受けている。

引用文献

大津友美(2013)「留学生は日本人学生の会話行動をどう評価するか—中国人留学生と日本人学生の初対面会話の場合—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』39, 17-29.

- 小宮修太郎 (2001) 「日本人の話し方に対して韓国人留学生が持つネガティブな印象についての調査研究」『留学生教育』, 6, 35-55.
- 小宮修太郎・平形裕紀子・長能宏子 (2001) 「日本人の話し方について留学生が持つ印象とその要因－中国人・韓国人・台湾人留学生の比較－」『筑波大留学生センター日本語教育論集』, 16, 47-82.
- 西阪仰 (2008) 「トランスクリプションのための記号 [v.1.2 2008年1月]」
<http://www.meijigakuin.ac.jp/~aug/transsym.htm> (2013年12月1日)
- ファン, S. K. (2002) 「対象者の内省を調査する (1): フォローアップ・インタビュー」
ネウストプニー, J. V.・宮崎里司 (編) 『言語研究の方法』くろしお出版, pp.87-95.
- 渡部倫子 (2005) 「日本語学習者の発話に対する日本語母語話者の評価—学習者のレベルによる相違」『大学教育研究紀要』, 1, 33-45.
- Fairbrother, L. C. 2000. Analysis of intercultural interaction management within a party situation. *The Japanese Journal of Language in Society* 2 (2), 33-42.
- Schegloff, E. A. & Sacks, H. (1973). Opening up closings. *Semiotica*, 8, 289-327.
- Tannen, D. (1984) *Conversational style: Analyzing talk among friends*. Norwood, NJ: Ablex

Negative Evaluations toward Interactional Behaviors of Japanese Students: How They Are Made through Interaction

OTSU Tomomi

At certain times, international students (IS) who reside and study in Japan evaluate Japanese students' (JS) conversational behaviors negatively. Through detailed analysis of conversations, this study explicates how such negative evaluations are constructed through the talk. The data comprises talk between IS and JS, along with the ISs' comments obtained through follow-up interviews. This paper discusses the ways in which ISs' and JSs' conversational behaviors work to co-construct such negative evaluations.